



まんだらげ

広報誌「まんだらげ」
の名称について

和歌山を代表する江戸時代の外科医・華岡青洲が全身麻酔薬として用いた植物「曼陀羅華(まんだらげ)」から引用しています。花に「医」の文字をデザインしたものは、大学の校章にも採用されています。



2014 春号

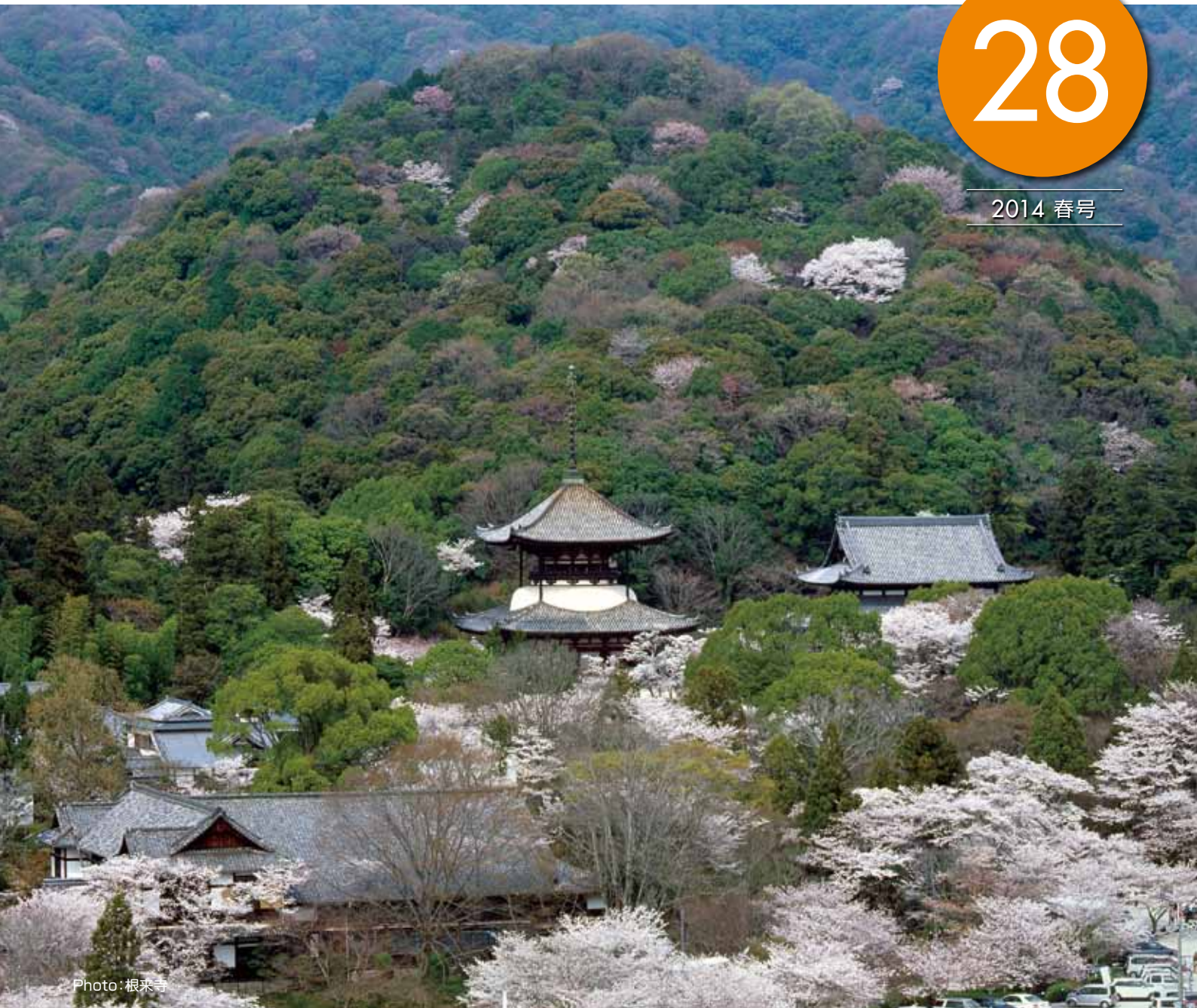


Photo: 根来寺

CONTENTS

- 特集／ドクターヘリ運航 10周年
- 専門職紹介／部門紹介／診療科紹介
- TOPICS
- お知らせ
- 掲示板

基本方針

- 1 患者さんとの信頼関係を大切にし、安全で心のもった医療を行います。
- 2 高度で先進的な医療の研究をすすめその成果を反映した医療を行います。
- 3 豊かな人間性と優れた専門技術を持った医療人を育成します。
- 4 和歌山県の基幹病院として、地域の保健医療に貢献します。

理念

私達は安全で質の高い医療を提供し、地域の保健医療の向上に貢献します。



和歌山県救急医療を支えるドクターヘリ運航10周年を迎えました

救急医療が求められる病態の多くは、病院までの搬送が予後を決める重要な要素になります。救命救急の医療チームがいち早く現場へ出動するドクターヘリは、まさに「空飛ぶ救命救急センター」。アクセスが困難な過疎地が多い和歌山県ではドクターヘリが大活躍。このたび10周年を迎え、報告会が開催され改めてドクターヘリの重要性・必要性について認識を深めました。

国公立大学病院では初導入

ドクターヘリコプター（通称・ドクターヘリ）は、2003年1月、国公立大学病院では初めて（全国7番目）和歌山県立医科大学附属病院に導入され、10周年を迎えました。和歌山県と奈良県、三重県合同運用であり、新生児・母体搬送、消防無線搭載など、当時では全国初の先進的な試みでした。紀伊半島をカバーするために、行政の枠組みである通常基地病院の半径約50km圏を超えて運行当初から半径約100km圏の広域運航範囲としてきたのも大きな特徴です。

2009年からは大阪府ドクターヘリ・徳島県防災ヘリ（2012年から徳島県ドクターヘリ）と相互応援協定を締結し、相互乗り入れ共同運用及び広域運航の影響に伴う要請重複に対応しています。

機体はEC135という小型で機動性の高い機種で、山間部が多い和歌山県に適しています。ドクターヘリは、地形特性や交通事情にとらわれない迅速な傷病者搬送手段であるだけでなく、救急医療専門医と看護師が同乗し救急現場に出動することで傷病者の救命、後遺症の軽減をめざすことが最大の目的です。



加藤 正哉
高度救命救急センター
センター長
(救急集中治療医学講座・教授)

フライトドクター研修プログラム 全国から医師や看護師が訪れる

現在当院のドクターヘリスタッフは運航スタッフ（操縦士と整備士＝ひらた学園）とフライトドクター、フライトナースで構成されています。フライトドクターは現在13人。「いずれも救急医として3年以上の経験を持ち、フライトドクターの研修プログラムを修了した医師ばかりです。ICU、ERにおける迅速判断や緊急処置トレーニングを基礎に、先輩のフライトドクターと共にフライト実施訓練を積みます。約30フライトを経験してフライトドクターとして一人立ちします」と、高度救命救急センターの加藤正哉センター長（救急集中治療部・教授）。さらに「当院は早い時期からドクターヘリを運航している経験と実績が評価され、航空医療学会の研修指定施設に選ばれています。そのため新たにドクターヘリを導入する施設のドクターやナースが研修に訪れます」

和歌山県ドクターヘリ運航 10周年報告会開催

救急集中治療医学講座・前教授の篠崎医師がドクターヘリ導入の経緯と事業成功の要因について語り、現在フライトドクターとして活躍中の岩崎医師がドクターヘリの10年間の運航実績を発表しました。

和歌山県ドクターヘリ運航10周年を記念した報告会が、2月7日(金)午後1時半から午後4時半、和歌山県立医科大学講堂で開催されました。講演会や症例検討会が行われ、訪れた医療関係者や消防職員ら約200人の参加者はドクターヘリの重要性について理解を深めました。

第1部は岸和田徳洲会病院救命救急センターの篠崎正博センター長が「和歌山県ドクターヘリ運航10周年を記念して」と題した記念講演を行いました。篠崎センター長は、和歌山県立医科大学附属病院・救急集中治療医学講座／高度救命救急センターの初代教授で、同センターの基盤を築いた第一人者です。記念講演会では、2000年9月に和歌山県でのドクターヘリ導入が検討されてからドクターヘリ調査委員会の設置など、ドクターヘリ導入までの経過について語り、さらに具体的な症例の紹介ほか、ドクターヘリ事業が成功した理由について「県民や医大周辺の住民、県行政、県医師会、県消防本部、和歌山医大職員、ヒラタ学園、ヘリクルーら全員のドクターヘリに対する理解と協力の賜物です」と、熱弁しまし



た。

続いて、和歌山県立医科大学・救急集中治療医学講座の助教であり、フライトドクターとしても活動している岩崎安博医師が「運航10周年報告」と題し、2003年～2012年の実績を発表しました。総出動件数は3532件(出動後のキャンセルを除くと3444件)、総診療人数は3475人。現場出動(消防からの要請)は2572人。そのうち傷病で最も多かったのが外傷1564人で全体の61%を占めました。

また、2011年9月の台風12号での災害対応出動は19件と活躍しました。このほか、岩崎医師は現場における実施症例を紹介し、今後について「消防との連携を強化し、災害時の複数機関ヘリの連携、平時の航空医療体制の確立が重要です」と述べました。



岸和田徳洲会病院救命救急センター長
篠崎 正博



和歌山県立医科大学・救急集中治療医学講座
助教
岩崎 安博



医療機器のスペシャリストとして 安全性と管理を徹底

臨床工学技士として18年、和歌山県立医大に勤務して15年。元々精密な機械をさわるのが好きで、祖父が医療関係だったこともあり臨床工学技士をめざしました。現在の業務は主に、人工心肺装置の操作や人工透析などの血液浄化業務のほか、ペースメーカーの外来で計測診療補助、さらに院内で使用しているME機器(医療機器)の安全管理を行っています。特に人工心肺業務では、機械を調整する安全管理だけでなく、患者さんに送った血液がきちんと巡回しているかどうかを確認する重要な役割を担っており、それだけにやりがいを感じます。医療機器と患者さんとの懸け橋となる、それが臨床工学技士です。

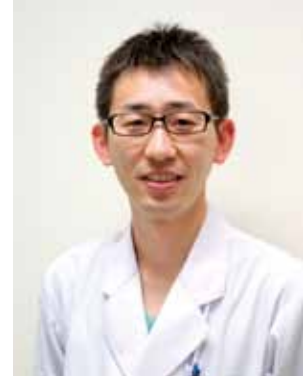


臨床工学技士
体外循環技術認定士

中村一貴さん

チーム医療のエンジニアとして スキルアップをめざす

医療の発展とともに、高度な医療機器が多くなってきています。それらの機器をより安全に操作するための専門的な知識と技術をもって業務にあたるのが臨床工学技士です。私は身内が人工透析を受けていたこともあり、医療現場で活躍したいと思いこの仕事に就きました。東京で臨床工学技士として10年働き、ふるさとである和歌山に戻り、和歌山県立医大に勤務して1年になります。業務は人工心肺業務や人工透析などの血液浄化業務、院内のME機器管理業務など。スキルアップのために、体外循環技術認定士の資格を取得しました。医療機器の操作や管理を通し、患者さんの「命」を支える医療チームのエンジニアとしてこれからも頑張ります。



臨床工学技士
体外循環技術認定士

稲垣伸光さん



リスク管理のもと徹底した 早期離床と運動負荷の実践

リハビリテーション部では、理学療法士16名、作業療法士4名、言語聴覚士3名、そしてリハ科医師8名が勤務。また、奈良、熊本、沖縄県内の病院から理学療法士5名が当科での研修のため臨時職員として勤務しています。

入院患者に対するリハ実施件数は本年2月の実績で1日平均250名に達し、平成15年以降年々増加しています。さらに今回の診療報酬改定で当院のような高度急性期医療機関では入院早期からのリハ推進が基本方針として明確化され、リハ専門職の病棟配置等の充実も求められています。

我々は周術期においては術前からリハを実施し運



動耐容能等を高め、術後および発症後は徹底した早期離床と運動負荷を実践しながら、入院時の活動性を如何に維持改善させ、早期退院や在宅復帰率向上に寄与できるか考えています。それらを実現するためには各診療科はもとより看護部はじめ院内すべての部署との協力や連携が必須となります。そのうえで常に患者の病態把握やリスク管理に努め、日々の業務の中で適切にリハが実践できるよう医師の指導の下、業務および科内教育体制の構築に努めています。

診療科紹介

脳神経外科

脳領域における最新の診断・技術を導入した治療

教授：中尾 直之

わたしたち脳神経外科は主として脳腫瘍、脳血管障害、脊椎・脊髄疾患、三叉神経痛や顔面痙攣、さらにパーキンソン病をはじめとする不随意運動などの疾患に対して、常に最新の診断・治療技術を導入して治療を行っております。たとえば、脳腫瘍の治療では、脳深部や頭蓋底の病変に対する難易度の高い手術でも、ニューロナビゲーションや神経内視鏡を応用してより確実性と安全性の向上を図っております。脳卒中の治療では、血管内治療を積極的に導入するこ



とにより、手術では到達困難な脳動脈瘤などの治療や頸動脈狭窄症に対するステント留置も数多く行っております。また、脊椎・脊髄疾患に対しては、顕微鏡を用いた繊細な手技により手術を行い、良好な治療成績を残しています。さらに、不随意運動に対する定位脳手術では、精密な電気生理学的モニタリングを行い治療の精度を高めています。

第三内科

呼吸器疾患、悪性腫瘍の世界的拠点を目指す

教授：山本 信之

第三内科は、呼吸器疾患全般（気管支喘息などのアレルギー疾患、慢性閉塞性肺疾患（COPD）、肺感染症、各種間質性肺炎など）を主に担当し、膠原病の診療も行っています。特に、喘息・COPD に関しては、病態を反映するバイオマーカーや呼吸リハビリなどの研究を精力的に行っており、当科の研究成果を元にして、呼気中の一酸化窒素濃度測定が喘息の診断方法として昨年保険収載されました。多数の呼吸器学会専門医・指導医を要しており、呼吸器疾患の診療・研究については、和歌山県の中心的役割を担うと共に国内のトップランナーとして認められています。

また、昨年4月に悪性腫瘍を専門とする山本



信之が赴任し、これまで以上に肺癌を中心にした悪性腫瘍の診療研究に力を注いでおります。当科で診療を受ける肺癌患者数は昨年比で1.5倍に増加しており、より有効な治療を開発するための新規抗がん剤の臨床試験も開始いたしました。今後は、化学療法センターと協力して、各種がん（特に他の診療科では扱っていないもの）の診療に取り組みたいと考えております。



最新型3T(テスラ)MRI装置が2月から検査開始

MRIとは磁気共鳴画像のことで、身体の様々な断面像が磁石と電波の力で映し出されます。当院では1.5T MRI装置を使用されていましたが、さらに質の高い医療の提供を目指して3T MRI装置に更新されました。磁場強度が1.5Tから3Tへと2倍になると感度が2倍になり、より鮮明画像が得られ、

検査時間も短縮されます。その結果、正確な画像診断が可能となり、病気の早期発見と早期治療につながります。



MRI装置 MAGNETOM Skyra 3T
SIEMENS 社製

脊髄疾患の精密な検査方法を開発

脊髄は細長く周囲を骨に囲まれているため検査ではMRIを使うしかありません。しかし、画像所見と症状が合致しなかったり、画像から重症度の判断がむずかしいのが現状です。そんななか、県医大では整形外科教室(吉田教授・寺口学内助教)と神経内科学教室(伊東教授)、生理学第一教室(金桶教授)の共同研究により、脊髄疾患の画像診断において新たなMRI画像処理技術による診断方法を開発しました。新たな T_1 / T_2 比による画像法では画像のコントラストが約2倍に向上し、病変部位の数値解析が可能。さらに従来からある2種類の画像を利用するただちに臨床応用ができ、また余分な検査時間がかからないので患者さんへの負担が少ないのが特徴です。今後は整形外科領域と神経内科領域での臨床応用を進めていく意向です。



吉田 宗人教授



金桶 吉起教授



寺口 真年助教



伊東 秀文教授

こども薬剤師体験イベント ～小学生が職業について学ぶ～

和歌山県立医科大学附属病院薬剤部では、子どもたちに薬剤師の仕事や薬について理解し、興味をもってもらうことを目的として、2月16日(日)「こども薬剤師体験イベント」を開催しました。

今回の体験プログラムは和歌山県立医大病院薬剤部としては初めての取り組みです。県内在住の小学5～6年生を対象に、午前10時から午後2時からの2回に分けて行われました。和歌山県内から参加者を募集したところ定員を超える申し込みがあり、当日は抽選で選ばれた32人の小学生が家族と一緒に参加しました。

はじめに体験概要が説明され、その後、DVD視聴・薬剤部見学班と、調剤体験班に分かれて実施しました。DVDでは薬剤師の仕事について紹介。そして普段見ることができない県立医大病院の薬剤部を見学。調剤体験では、ジュースや菓子を使った疑似調剤や軟膏を練ったりするなど、薬剤部のスタッフの丁寧な指導のもとで実施されました。

白衣を着て1日薬剤師になった小学生らは、小学校では学習できない仕事を熱心に学んでいました。



和歌山県医学偉人シンポジウム開催

和歌山県立医科大学では、和歌山県が世界に誇る医師の功績を末永く学内外に伝えることを目的として、2月13日(木)午後1時30分から和歌山県立医科大学医学部講堂で「和歌山県医学偉人シンポジウム」を開催しました。

第1部では、世界で初めて全身麻酔を用いて乳がん手術を成功させた「華岡青洲」^{はなおかせいしゅう}、江戸時代後期、日本で初めて国産天然痘ワクチンの開発に成功した「小山肆成」^{こやましせい}、アミノ酸代謝研究の第一人者で県立医大初代学長の「古武弥四郎」^{こたけやしろう}。彼ら3偉人の業績について、当時の写真や文献を使いながら功績を紹介。

第2部では「乳がん撲滅にむけて」をテーマに、5年前に乳がんを克服した歌手で女優の園まりさんや乳

がん患者会「ひまわりの会」の代表者らがパネリストとして参加し、県立医大の板倉徹理事長、尾浦正二准教授による意見交換が行われました。



園まりさん



小武弥四郎の業績を紹介した和歌山県立医科大学学生化学教室・井原義人教授



小山肆成の業績を紹介した和歌山県議会・立谷誠一議員



華岡青洲のについて語った和歌山市立博物館・高橋克伸総括学芸員

新生児搬送用ドクターカー一新

和歌山県立医科大学附属病院の新生児搬送用ドクターカーを更新しました。この車両の更新を機に和歌山市立和歌山高等学校デザイン表現科のみなさんにシンボルマークのデザイン制作を依頼しました。多数よせられた作品の中から、県立医大の校章である、「まんだらげの花」や、本県特産の「みかん」の色が使われた林真由さんの作品が選ばれ、車体に大きく描かれました。2月28日(金)附属病院の正面玄関で感謝状の贈呈式が行われました。



岡村吉隆病院長から林真由さんに感謝状が贈られました。

お知らせ

無料シャトルバス運行中止のご案内

新棟建設に伴う駐車場不足のため、外来患者さんと付添者、入院見舞者を対象に、平成24年11月中旬から無料シャトルバス(和歌山県立医科大学附属

病院⇄JR紀三井寺駅間)を1日20往復半、運行していましたが、このたび新棟完成に伴い平成26年3月31日をもって無料シャトルバス運行を中止させていただきます。

予約センターからのお知らせ ～診察予約のご案内(初めて受診される方)～

当院の外来受診は、原則として「**予約制**」とさせていただきます。
ご予約は、できるだけかかりつけの医療機関などからFAXでお申し込みください。

■医療機関からのご予約

- ① **かかりつけの医療機関などから当院所定の「予約申込書」**にて地域連携室にFAX送信してください。
- ② 20分以内を目途に予約をお取りし、予約日時・医師名を記載した予約票を発信元の医療機関にFAX返信いたします。
- ③ 予約当日は、**予約票・紹介状・保険証・診察券(受診歴のある方)**をご持参のうえ、**外来受付**に直接お越しください。

地域連携室

FAX番号: 073-441-0805
受付時間: 月～金 9:00～17:00
(土・日・祝日・年末年始を除く)

※毎週金曜日は試行的に18:00まで受付しています。

■ご本人からのご予約

- ① **かかりつけの医療機関などで紹介状**をご用意ください。
※特定の医師による診療をご希望の場合は必ず「〇〇科 〇〇医師」と明記した紹介状をご用意ください。
- ② 「**当院予約センター**」に直接お電話ください。
- ③ 予約当日は、**紹介状・保険証・診察券(受診歴のある方)**をご持参のうえ、**外来受付**に直接お越しください。

電話予約センター

電話番号: 073-441-0489
受付時間: 月～金 8:30～16:00
(土・日・祝日・年末年始を除く)

※電話だけでなく9:30～17:00まで院内の予約窓口も開設しています。

看護師助産師募集中

※募集等詳細につきましては当大学ホームページをご覧ください。
または下記までお問い合わせください。

和歌山県立医科大学附属病院では看護師・助産師を募集しています。

TEL 073-441-0711 (事務局総務課)
<http://www.wakayama-med.ac.jp>
公立大学法人和歌山県立医科大学 和歌山市紀三井寺811-1

病院ボランティア募集

みなさまの温かいお力をお待ちしております。

外来または病棟で、患者さんが安心して治療を受けることができるようボランティアの方を募集しています。

活動時間

外来①: 8時50分～11時30分
外来②: 11時50分～14時50分
病棟: 病棟と調整の上決定します。

問い合わせ先

和歌山県立医科大学附属病院
代表: 073-447-2300
医事課 ボランティア担当

※年齢制限等はありません。
詳細はお問い合わせください。

患者さんの権利

当院では、受診される皆様が、以下の権利を有することを確認し、尊重します。

- 1 個人として尊重され、平等に良質な医療を受ける権利があります。
- 2 診療に関して、十分な説明と情報を受ける権利があります。
- 3 十分な情報を得た上で、自己の意思に基づいて医療を受け、あるいは拒否する権利があります。
- 4 他の医療者の意見(セカンドオピニオン)を求める権利があります。
- 5 個人情報やプライバシーを保護される権利があります。

※当院では、患者さんの安全を守ることを第一に診療を行っておりますが、他の患者さんや職員への暴力・暴言・大声・威嚇などの迷惑行為があった場合は診察をお断りすることや退去を求めることがあります。著しい場合は警察に通報いたしますのでご了承ください。

患者さんへのお願い

当院では、さまざま医療を提供しておりますので、次のことを十分ご理解いただき、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

- 1 適切な医療を実現するために、患者さんご自身の健康に関する情報をできる限り正確にお話してください。
- 2 医療に関する説明を受けられて理解できない場合は納得できるまでお聞きください。
- 3 治療上必要なルールはお守りください。また治療を受けていて不安を感じましたらすぐにお知らせください。
- 4 すべての患者さんが適切な医療を受けられるようになるため、他の患者さんのご迷惑にならないようご協力ください。
- 5 当院は教育・研究機関でもありますので、医学生・看護学生などが実習や研修を行っております。ご理解とご協力をお願い申し上げます。